





「白夜行」第五章と第六章のまとめ

時間：1981年～1982年

1981年

発見：5月の木曜日

被害者：川島江利子

発見者：川島江利子の母

なにが：全裸で発見されたが、強姦はなかった

どこで：自宅の近所の路地に止まっていた、トラックの荷台の上

どうやって：川島江利子は帰宅途中、自宅の近所で、クロロホルムで昏睡状態に

犯人：不明

その他：関西弁の若い男が、倉橋香苗から25万円（前金12万円、後金13万円）でなんらかの仕事を依頼されたことを篠塚一成に話し、後金の催促の電話をかけてきた。

部費を管理するキャッシュカードは、帳簿の整理の時に雪穂が数日所持していたが、倉橋に返却し、以降は倉橋が持っていた。篠塚が部費の口座を調べると、男が催促したとおりの金額の出金があった。

江利子と篠塚に、川島江利子の全裸の写真が、差出人不明で送られてきた（篠塚宛には速達だった）。

江利子が中学時代に発見者として遭遇した、藤村都子の事件に酷似している。

1982年

発見：日時の明記はないが、『機動戦士ガンダム』の映画ポスターが貼られていることから、3月ごろと思われる

被害者：西口奈美江

発見者：本文に登場せず（状況から、ホテルの従業員と思われる）

どこで：名古屋のビジネスホテル

どうやって：胸部と腹部をナイフのようなもので、刺殺

犯人：不明

その他：死後、72時間（3日間）以上が経過していた。

奈美江が不正送金していた口座の約2000万円以上は、行方不明。

現金自動預入支払機の防犯カメラに、明らかに変装した女が映っていたが、変装した女が身に付けていたカツラ、サングラス、マスクは、奈美江の荷物から発見された。

清華女子大学は豊中市にある。

—中略—

清華女子大学と最も交流が多いとされる永明大学などから、自分たちのクラブやサークルに新鮮で魅力的なメンバーを入れようと、男子学生たちが大挙して押しかけてきているからだ。P253、254

雪穂と江利子は共に清華女子大学英文学科に入学した。

女子大だが、永明大学とは交流が盛んで、学内で男子学生がサークル勧誘に熱心だ。

江利子は興味がないわけではないが、雪穂の興味を優先しているようだ。

白い肌を大切にす雪穂は、屋外で活動するサークルには目もくれなかった。

そんな彼女が、足を止める。

その雪穂が足を止めた。猫のように少しつり上がった目を、彼女はあるサークルのポスターに向けていた。

—中略—

ソーシャルダンス部、とポスターには書いてある。括弧がついていて、永明大学合同、と但し書きがしてあった。P256

人目を引く雪穂は、あっという間にソーシャルダンス部の男性に受付に連れて行かれ、江利子は離れた場所で待っていた。

そんな江利子に、声をかけたのは、永明大学の部長・篠塚一成だった。

篠塚は江利子をソーシャルダンス部に誘い、なかば強引に、受付に連れて行った。

名簿に名前を書き終えた雪穂が、三人の男子学生に何かいわれて笑っていた。雪穂は江利子が手を惹かれているのを見て、少し驚いたようだ。

—中略—

「あっ、シノヅカさん・・・」受付にいた女子部員が呟いた。P259

江利子は声をかけてきた篠塚のダンスや言葉に心酔したかのようで、雪穂と二人、入部した。

篠塚は江利子に興味を持っていたが、それは、いままで彼の周囲にいないタイプの女性だったからだ。

清華女子大学のソーシャルダンス部キャプテンである倉橋香苗のように、、自分から彼に、ダンスのパートナーとしても、恋愛対象としても、選んでほしいと言ってきた女性ではなく、彼自身が自分で見つけた女性が江利子だった。

彼は、製薬会社では日本でも五指に入る篠塚薬品の、専務の長男だった。現社長は伯父にあたる。つまり掛け値なしの御曹司ということになる。そういう人物が自分の身近にいること自体、江利子には信じられないことだった。だから声をかけてきたのも、御曹司の気紛れだろうと解釈していた。P266

また香苗にしても、本当に自分のことを愛してくれているのかは怪しいと思った。彼女はただブランドが欲しいだけではないのか。時折彼女は将来という言葉を用いるが、仮に自分との結婚を望んでいたにしても、それは彼女が彼の妻になりたいからではなく、篠塚一族の中に食い込みたいからではないかと一成は推測していた。P275、276

ダンス部でも周囲に篠塚への独占を見せつけようとする倉橋の行動に、篠塚は倉橋との別れを考え始めていた。

それを埋めるように、篠塚の関心は江利子へ向かっていく。

美容院で、彼女に似合う髪形に変えて、化粧も施し、ブティックで、高級ブランドのワンピースをプレゼントする。

そんな彼女の変貌に、周囲の視線も変わり、いままでの江利子では考えられないほど、注目される存在になる。

しかし一人、倉橋香苗は、苦々しげに江利子に接する。

練習が始まる前に、江利子は二年生の先輩に呼ばれた。

「部費の支出を計算しといて」

—中略—

「いつまでにすればいいんですか」

「今日の練習が終わるまでに、やて」先輩はちらりと背後を見た。「倉橋先輩の指示や」

—中略—

江利子は袋の中を覗いた。細々としたレシートが、びっしり入っているのが見えた。帳簿を出して広げたが、きちんと記入されていたのは二、三年前までのようだ。

何かが下に落ちた。拾い上げると、プラスチック製のカードだった。

「キャッシュカードじゃない」雪穂がいった。「たぶん部費を入れてある口座のものよ。いい加減ね、こんなところに放り込んでおくなんて。盗まれたら大変なのに」

—中略—

江利子はカードの表面を見た。三協銀行という文字が印刷されていた。

—中略—

練習所の隅で江利子は帳簿つけを始めたが、思いの外に時間がかかった。途中雪穂が手伝ってくれたが、計算を終え、帳簿への記入を済ませたときには、練習時間もなくなっていた。

二人は帳簿を持って、体育館の廊下を歩いた。更衣室にいるはずの、倉橋香苗に渡すためだった。ほかの部員たちは、殆ど帰ってしまったようだ。P281、282

女子更衣室の中から、篠塚と倉橋の声がして、物別れに終わったようで、倉橋は飛び出して行ってしまった。

篠塚が出てきて、江利子と雪穂に鉢合わせた。

雪穂は江利子を篠塚に託し、倉橋が歩いて行った方向へ歩き出した。

「帳簿は、今度あたしが倉橋さんに渡しておく」雪穂は江利子の手から袋を取り上げた。P283

篠塚は、江利子を送る道すがら、正式に交際を申し込んだ。

それから二週間以上がたち、江利子は外見も内面も、どんどん変わっていった。

倉橋香苗は、ダンス部の練習に二度出ただけで、それ以外は欠席している。

女子大内で江利子と顔をあわせても、鋭い視線を向けるだけで、挨拶もなかった。

そんな矢先、江利子が事件に遭遇した。

金曜日、篠塚は江利子とデートの約束をしていたが、彼女は現れず、一週間以上経っても、電話で話すことすら家族に拒まれた。

江利子の家族に、電話も取り次いでもらえず、それとなく交際も終わりを告げられた。

しかも、江利子がそう望んでいる、と。

混乱している篠塚に、ある日、ダンス部の練習中、奇妙な電話を受け取った。

様々な考えをめぐらせながら、一成は体育館内にある練習所に戻った。すると女子部員の一人が、彼を見つけて駆け寄ってきた。

「篠塚先輩、変な電話がかかってきているんですけど」

「変な電話？」

「清華女子大のダンス部の責任者を呼べて・・・。倉橋さんは休んでるっていったら、じゃあ永明大の部長でもいいって」

—中略—

「電話、代わりました」

「永明大の部長さんか」男の声が尋ねてきた。低い声だが、まだ若い男のようだった。

「そうですけど」

「清華に倉橋という女がおるやろ。倉橋香苗」

「いるけど、それがどうかしたのかな」相手に合わせて一成も、丁寧な言葉を使うのはやめることにした。

「あの女に伝えてくれ。早よ金を払えてな」

「金？」

「後金や。万事うまいことやったから、成功報酬をもらわなあかん。前金十二万、後金十三万の約束やったはずや。さっさと払えというといてくれ。どうせ部費の管理はあの女がしてるんやろ」

「それは何の金かな。何をうまくやったっていうんだ」

「それをあんたにいうわけにはいかへんな」

「立ったら、俺に伝言を頼むのも変じゃないか」

一成が訊くと、相手の男は低く笑った。

「それが変ではないんや。あんたから伝えてもらうのが一番効果的なんや」 P290、291

篠塚は倉橋に対して不信を抱いたが、物別れに終わって以来、まともに話が出るかわかりかねた。

その電話が会った日、篠塚宛に、差出人不明の速達が届いた。

住所や宛名は、定規を使って書いたような、奇妙な文字で記されていた。

彼は部屋に入り、ベッドに腰かけると、不吉な予感を抱きながら封筒を開けた。

中には写真が一枚入っているだけだった。 P292

篠塚は雪穂をファミリーレストランに呼び出した。

雪穂は江利子のことについて口を閉ざしていたが、篠塚が写真の話をする、雪穂に変化があった。

「写真が送られてきたんだよ。匿名で、しかも速達で」

「写真？」

「こんなもの、君に見せたくはないんだけど」一成は上着のポケットに手を入れた。

「待ってください」雪穂があわてて叫んだ。「それは、あの・・・トラックの荷台の？」

—中略—

「江利子？」

「そう」一成は頷いた。全裸姿で、という説明は省いた。

—中略—

「警察には届けたのか」

「いえ」

「どうして？」

「大騒ぎして、このことが世間に知れ渡ったら、そっちのほうがいよいよ痛手だって江利子の御両親が・・・。あたしも、そう思います」

一成は拳でテーブルを叩いた。苛立つ話だが、両親たちの気持ちは理解できた。

—中略—

一成は、先週の金曜日に、正体不明の男から電話があったことを雪穂に話した。

「電話の後にすぐ例の写真を見たものだから、俺はすぐに両者を結びつけて考えたわけだよ。それから、電話の男が妙なことをいってたことも思い出した。ダンス部の部費は香苗が管理しているんだろう、という意味のことだ」

雪穂が息を止める気配があった。「犯人に渡す金に、部費を使ったってことですか」

—中略—

一成は声をひそめた。「先々週の火曜日に、十二万円の金がカードで引き出されている。さらに

今朝確認したところでは、今週はじめにも十三万円が下ろされていた」

「だけどそれは倉橋さんが下ろしたとはかぎらないんじゃないですか。ほかの人かも」

「調べたかぎりでは、ここ三週間、彼女以外の間人はカードに触れてもいない。最後に触ったのは君だよ」そうやって彼は雪穂の胸元を指差した。

「帳簿の計算を江利子がやらされた時ですね。あの二、三日後に、帳簿とカードを倉橋さんに渡したんですけど」

「それ以来、カードは彼女が持ち続けている。決まりだよ。彼女が男を雇って江利子を襲わせたんだ」 P293-296

篠塚は証拠をつかんでいる以上、警察に届け出て、倉橋を断罪することを望んだ。

しかし、江利子の両親は騒げば傷が深くなることを心配して、このまま沈黙することを望んだ。

警察沙汰にしたいのは篠塚の独りよがりであって、篠塚自身の問題だと、雪穂は看破した。

そして、江利子から頼まれた別れの言葉を伝えて、その場を後にした。

雪穂が江利子に見舞いと報告に行くと、江利子は横になって退屈を紛らわしていた。

あの夜、いつまでも帰ってこない娘のことを心配した母親が、駅まで迎えに行く途中、トラックの荷台の中で倒れていた江利子を発見したのだった。江利子はまだ昏睡状態だった。

—中略—

さらに数日後に送られてきた、あのおぞましい写真。差出人は不明で、何のメッセージも書かれていない。それだけに、犯人の奥深い悪意がこめられているようで、江利子は震撼した。

—中略—

悲惨極まりない出来事だったが、一つだけ救いがあった。じつに奇妙なことだが、彼女の処女は奪われていなかった。全裸にし、無残な写真を撮ることだけが、犯人の目的だったらしい。

両親が警察に届けないことを決心した理由はそこにある。下手に騒げば、どんな噂を立てられるかわかったものではない。事件のことが知れば、誰もが彼女のことを、犯されたと思うだろう。 P299、300

雪穂は江利子に頼まれたメッセージを篠塚に伝えたと報告して、江利子を優しく勇気付けた。

その背後では、テレビのニュースで、銀行口座の預金が、本人の知らない間に引き出されるといふ、キャッシュカードの偽造事件が報道されていた。

第六章 事件について（抜粋） 第三者視点：園村友彦

園村友彦は高校卒業後、信和大学工学部電気工学科へ進学して、2年生になっていた。

高校の同級生だった桐原亮司は、進学せず、立ち上げた『無限企画』を続けて、かなりの成果を上げていたが、行き詰まりつつある状況だった。

園村が進学先を工学部電気工学科に決めたことは、亮司が少なからず影響していた。

園村が大学に進学して、亮司は、園村が大学での専門課程の講義を書きとめたノートを熱心に読み、学内の学生よりも授業内容を理解していた。

そのころ、つまり大学に入学した年、亮司が関心を持っていたのが、キャッシュカードやクレジットカードなどの磁気カードだった。

最初に手を出したのは、友彦が大学に入学して間もなくのころだった。きっかけは、友彦がある装置を大学内で目撃したことだ。磁気テープに打ち込まれた情報を読んだり、その情報を書き換えたり出来るその装置は、エンコーダーと呼ばれた。

その装置の話を知ると、桐原の目の色が変わった。そしてこんなことをいった。

「それを使ったら、キャッシュカードの複製なんかも作れるわけや」

「そりゃあ作れるかもしれないな」と友彦は答えた。「けど、作っても意味がないんじゃないか。キャッシュカードを使うには暗証番号が必要やろ。だからこそ、キャッシュカードというのは、万一落としても安心なんじゃないか」

「暗証番号か」

その後桐原は黙って何事か考えている様子だった。

彼がマイコンプログラムの事務所に、ラジカセぐらいの大きさの段ボール箱を運びこんだのは、それから二、三週間が経った頃だ。

—中略—

この中古のエンコーダーを入手して間もなく、桐原は一枚のキャッシュカードを偽造した。そのオリジナルとなったカードが、誰のものなのかは友彦も知らない。何しろ桐原の手元にあったのは、ほんの数時間だけだったのだ。

桐原はそれを使って、二十数万円の金を二回に分けて引き出したようだった。P312、313

しかし、亮司は、別の方法を取ることも出来たのだ。

だが、これには少しからくりがあった。じつはエンコーダーを入手する以前から、桐原は磁気カードのパターンを読むことに成功していたらしいのだ。

—中略—

彼が用意したのは磁石の微粉末だ。それをカードの磁気部分にふりかけた。間もなく友彦は、あっと声を上げた。

磁気テープの部分に、細かい縞模様が浮かび上がってきたのだ。

—中略—

「—前略—暗証番号がわからなくても、パターンを浮かび上がらせたら解読できる」

「すると拾ったり盗んだりしたキャッシュカードも、こんなふうに磁石の粉をふりかけたら・・・」

「使えるということやな」P313

だが桐原は、この秘密の技術を、すぐには活用しようとしなかった。本業のマイコンプログラム製作が忙しかったせいもあるが、何より、他人のカードなど、そう簡単には手に入らないということがあった。使ったのは、エンコーダーを入手した直後に、どこからのキャッシュカードを複製したときだけだった。しばらく、彼がカードの話をする事はなかった。

ところが今年になって、桐原がこんなことをいいたした。

—中略—

「要するに必要なのは現存する口座番号だけであって、暗証番号ではない。まあ考えてみたら当たり前のことやった」

—中略—

「—前略—このカードを機械に入れたら、機械は磁気テープに組み込まれた、いろいろな情報を読み取る。その中の一つが口座番号と暗証番号や。当然のことやけど、機械にはカードを入れた人間が本人かどうかはわからん。それを判断するために、暗証番号を押せという。磁気テープに記録された番号と同じ数字が押されたら、疑うことなく要求された金を吐き出す。ということは、磁気テープに何も記録されていない白紙のカードを持ってきて、そこに口座番号なんかの必要事項を記録し、最後に適当な暗証番号を入れたらどうや」

「あっ」

「—前略—機械が確認するのは、磁気テープに記録された番号と、人間が押す番号が一致するかどうかということだけや」

「じゃあ実在する口座番号がわかったら・・・」

「いくらでも偽物のキャッシュカードを作れるということになるな。偽物やけど、金はちゃんとおろせる」 P313-315

そして、実際に二人は偽造したキャッシュカードで、他人名義の預金を引き出した。

もちろん犯罪だが、園村にとっては、なにからなにまでゲームのような感覚で、引き出した金の持ち主が見知らぬ他人、ということも、犯罪を意識しにくい原因だった。

ある金曜日の午後、事務所にしているマンションに、得体の知れない男たちの団体が押し入ってきた。

エノモトという男が引き連れいていて、彼は奈美江を探していた。

西口奈美江は、平日は銀行に勤め、週末の休日は『無限企画』の経理を担当していた。

男たちは部屋中を土足で歩き回り、奈美江を探した。

エノモトは二人を脅し、亮司の掌に火のついた煙草を押し付けて、出て行った。

奈美江と連絡が取れないまま、園村は帰宅して、亮司は残った。

その夜のニュースで、ある銀行員の殺人事件が報道されていた。

「今朝八時頃、昭和町の路上で中年の男性が胸などから血を出して倒れているのを、通行人が発見し、警察に通報しました。男性はすぐに病院に運ばれましたが、間もなく死亡しました。この

男性は、此花区西九条に住む銀行員真壁幹夫さん四十六歳で、胸などを鋭い刃物のようなもので刺されているということです。通行人が真壁さんを見つける直前、現場付近では出刃包丁のようなものを持った不審な男性が目撃されており、警察では事件と何らかの関係があるとみて、その行方を追っています。真壁さんは現場から百メートルほどのところにある、大都銀行昭和支店に出勤する途中でした。次に―」 P328、329

亮司から園村に電話が入り、ホテルへ呼び出され、急遽向かった。

ホテルの一室には、亮司と、行方不明だった奈美江がいた。

奈美江は、銀行での職権を利用して、預金を不正に着服して、エノモトの口座に入金していた。多い時は二千万円以上もの金額を、1年以上も貢ぎ続けていたが、とうとうそれに感づいた人間がいた。

上司である真壁は、まさか奈美江が犯人とは思わず、実務を預かる奈美江に相談した。

彼女はエノモトに連絡して着服はやめようとしたが、奈美江が流す大金を失いたくなかったエノモトは、真壁を殺害した。

そして彼女は、エノモトから逃げる決心をした。

「というても、当面どこに身を置くのかも決まってない。いつまでもこんなホテルにおったら、いつかは見つかってしまう。エノモトからは逃げられても、警察からはそう簡単に逃げられへんからな。長期間隠れてても平気そうなところを、今日と明日の二日間で俺が探してみる」

「見つかるかな」

「見つけるしかない」 P335

亮司は自首をまったく考える様子もなく、長期間の潜伏場所を探す、と言い切る。

そして、園村には、二日間（土曜日・日曜日）外出できない奈美江に代わって、買い物など外出の用事をしてほしい、ということだった。

月曜日の朝、桐原が迎えに現れた。彼はまず奈美江に謝った。いい隠れ家が確保できなかったから、しばらく名古屋のビジネスホテルで身を潜めていてほしいというのだった。

「昨日はそういう話やなかったらいいか」友彦はいった。昨夜桐原から、いい場所が見つかったから明日の朝出発しようという内容の電話が入っていたのだ。

「今朝になって、急に都合が悪くなった。長い間やないから、ちょっと我慢してくれ」

―中略―

ホテルの地下駐車場には、白のマークIIが止めてあった。レンタカーだと桐原はいった。仕事に使っているライトエースを動かすと、エノモトたちが怪しむからだという。

「これ、新幹線の切符。それからビジネスホテルの地図」車に乗り込んでから、封筒と白いコピー用紙を桐原は奈美江に渡した。

「いろいろありがとう」彼女は礼をいった。

「それからもう一つ。これを持っていったほうがええ」桐原が紙袋を出してきた。

—中略—

袋の中には、やたら強いカールをつけた女性用のカツラと大きなサングラス、そしてマスクが入っていた。

「例の架空口座の金を、キャッシュカードでおろさなあかんやろ」車のエンジンをかけながら桐原がいった。「そのときには、できるだけ変装したほうがええ。多少不自然でも、カメラに顔が映らんようにせんとな」

「至れり尽くせりね。ありがとう。使わせてもらう」奈美江は紙袋を、すでに満杯と思われるボストンバッグに押し込んだ。

「向こうへ着いたら連絡してくれよな」友彦がいった。

「うん」奈美江は笑顔で頷いた。P346、347

西口奈美江の死体が、名古屋のビジネスホテルで発見されたのは、友彦が彼女を見送ってから四日目のことだった。胸部と腹部をナイフのようなもので刺されていた。この時点で、死後七十二時間以上が経過していると判断された。

奈美江が勤務する銀行には、二日間の休暇届が出されていた。三日目からは無断欠勤となり、行内でも彼女の行方を捜していたという。

奈美江の持ち物の中には、五つの預金通帳が入っていた。そこに入っていた預金総額は月曜日の時点では二千万円をはるかに超えるものだった。それが死体発見時には、殆どゼロになっていた。

—中略—

警察は、西口奈美江が送金していた口座から、会社役員榎本宏を横領の疑いで逮捕した。また西口奈美江が殺された事件についても、榎本を取り調べる方針だということだった。

ただ、奈美江が五つの口座から引き出したはずの金は、まだ見つからなかった。奈美江自身がカードで下ろしたことは確かだった。現金自動預入支払機の防犯カメラに、変装した女が映っていたのだが、用いられたカツラ、サングラス、マスクが、彼女の荷物の中から見つかっているからだ。P348、349

こうして、事件は終わった。

奈美江が殺された手口は、彼女の上司である銀行員が殺されたときの手口と似ていた。

おそらくエノモトの手の者だろうが、他にいくつか腑に落ちない点がある。

月曜日の朝から出発しているが、ホテルにチェックインしたのは何時だろうか？

当時の時刻表を確認したが、新幹線で新大阪～名古屋間は、こだまでも約1時間半程度であった。

ホテルのチェックインは通常午後からとなっているが、亮司は前日から宿泊するとして部屋を押しさえていたのだろうか？

奈美江は園村に電話する、と約束していたが、事務所にも園村の自宅にも連絡はなかった。

エノモトたちは、奈美江の潜伏先をどうやって知ったのだろうか？

亮司が奈美江を裏切ったことは確かだろうが、なぜ？また、なんのために？

奈美江はホテルの部屋で殺されたが、エノモトの手の者とわかりながら、何故室内に入れたのだろうか？

エノモトたちが、奈美江に固執した理由はなぜだろうか？

銀行側が調べれば、不正操作による口座の金の流れは一目瞭然で、たとえ奈美江の口を封じても、証拠は残っているし、殺せば警察が調べるのだから、不正操作の捜査も行われて、すべては白日の下にさらされる。

ヤクザの落とし前が必要だった、ということだろうか。

預金を下ろしたのは、月曜日ということだが、防犯カメラに映っていた変装した女は、本当に奈美江だろうか？

口座番号がわかれば偽造カードで出金できる、と本文にある。

どこの支店で・・・大阪では、二人が奈美江が新幹線に乗るまで見送って、二千万円を持っている描写もない。

やはり名古屋だろうか。

ボストンバック二つを持ち歩いて、また現金入りのかばんというのは考えにくい。

駅からホテルへ直行して、必要な道具だけ持って、現金を下ろしてホテルに引き返す。

エノモトの刺客に襲われて、現金が行方不明になる。

奈美江がホテルに到着してから四日後に発見された、ということは、その日まで料金は前払いしてあったのだろう。

時系列を追って考えてみる。

日曜日の夜、亮司がいい隠れ場所を見つけたから、月曜日の朝の出発と連絡してきた。

亮司は新幹線の切符と名古屋のホテルとレンタカーの手配していたことになる。

月曜日の朝、レンタカーで駅まで移動する。

しばらくの間は名古屋のビジネスホテルに滞在して、その後に潜伏先へ移動する、という話になる。

奈美江は変装用具を受け取り、名古屋へ出発した。

二人は事務所に戻り、その後は園村が早くに引き上げた以外、亮司の行動は不明。

奈美江は名古屋で、変装して大都銀行の支店に行き、二千万円を引き出す。

ホテルの部屋で殺害されて、二千万円は行方不明。

なぜレンタカーだったのか？

もしかしたら、仕事で使っているライトエースは、他の誰かが使っていた？

早朝から動かせば怪しまれる、というのは納得できるが、他の時間帯なら問題ない。

新幹線では1時間弱だが、目撃される可能性がある。

車では約3時間だが、目撃される可能性は低い。

本文で描写されない部分を推察するのは、ご都合主義に陥るので、このあたりでやめておく。

だが。

日曜日にエノモトと話をつけて、新幹線、ホテル、レンタカーの手配をする。

月曜日に奈美江を駅に送った後、亮司と女性がライトエースで名古屋に行き、エノモトの手の者が殺害した奈美江の荷物から預金通帳を確認して、女性が変装して偽造カードを使い二千万円を出金して、エノモトと分ける。

これらのことも可能ということだ。

亮司（本文抜粋）

「すまん」友彦は、桐原の横顔に向かって、もう一度謝った。

「二度と、こういうことはいわへんからな」

「わかってる」友彦は答えた。桐原が同じ過ちを犯す馬鹿を許さないことは、十分に承知していた。P309

友彦が専門課程の講義を真面目に聞く理由は、殆ど一つだった。そうするように桐原亮司から命じられているからだ。ビジネスのためだという。

もともと友彦が電気工学科を選んだこと自体、桐原の影響が小さくなかった。高校三年の時点で理数の成績がよかったので、工学部が理学部に進もうとは思っていた。しかし学科までは決めかねていた。そんな彼に桐原がいったのだ。

「これからはコンピュータの時代や。おまえがそういう方面の知識を仕入れてくれたら、俺も助かる」

—中略—

これに対して友彦は、そんなにいうなら自分が進めばいいんじゃないか、と桐原にいったことがある。桐原も、友彦に勝るとも劣らないほど理数科の成績がよかったからだ。

だがこの時彼は、頬を少しひきつらせたような笑みを浮かべた。

「大学に行く余裕があったら、こんな商売やってへんわ」

この時初めて友彦は、彼が進学しないことを知った。

—中略—

こうした理由から、友彦は専門課程の講義をできるかぎり真面目に受けようと決めたのだが、驚いたことに、彼がそうやってノートにまとめたものを、桐原じつに熱心に読むのだった。そのノートの内容を理解するために、専門書を横に置いたりもしている。桐原は信和大学の講義には一度も出ていないが、まず間違いなく、最も講義内容を理解している人間だった。P310、311

この中古のエンコーダーを入手して間もなく、桐原は一枚のキャッシュカードを偽造した。そのオリジナルとなったカードが、誰のものなのかは友彦も知らない。何しろ桐原の手元にあったのは、ほんの数時間だけだったのだ。

桐原はそれを使って、二十数万円の金を二回に分けて引き出したようだった。P312、313

「落ちてるものを拾うのと、置き引きと、どう違う？ 金の入ったカバンを、ぼんやり置いとくほうが悪いんと違うか。この世は隙を見せたほうが負けや」 P316

男は、タバコの灰をテーブルの上に落とそうとした。すると素早く桐原が、灰を受けるように自分の左手を差し出した。

男が片方の眉を上げた。「何の真似や」

「ここには電子機器が沢山あるから、タバコの灰には気をつけてもらわんと」

「そしたら灰皿を出せ」

「ありません」

「ほお」男の口元が歪んだ。「ほな、こいつを使わしてもらおか」というと桐原の掌の上にタバコの灰を落とした。

桐原が眉ひとつ動かさなかったのが、男は気に食わなかったようだ。「なかなかええ灰皿、持つとるやんけ」というとそのまま煙草の火を掌に押しつけた。

桐原が全身の筋肉を緊張させているのが、友彦の目にも明らかだった。しかし彼はさほど表情を変えず、声も漏らさず、左手を出したまま、男の顔をじっと睨み続けていた。

「それで根性見せたつもりか。ああ？」男がいった。

「別に」

—中略—

「奈美江から連絡があったら、ここに電話してくれ。電気屋やというたらわかるようにしておく」

「おたくの名前は？」

「わしの名前なんか、聞いたかてしょうがないやろうが」男は立ち上がった。

「もし連絡しなかったら？」桐原が訊いた。

男は笑い、鼻から息を吐いた。

「なんで連絡せえへんのや。そんなことして、にいさんらが何か得することがあるか」

—中略—

桐原はしばらく男の顔を見た後、小さく頷いた。「わかりました」

「それでええ。にいさんはあほやない」 P323-325

「うまいこと逃げのびられたらええんやけどな」

友彦がいったみたが、桐原は何とも答えなかった。そのかわりにこんなことを訊いてきた。

「エノモトとの話、聞いたか」

うん、と友彦は答えた。

「あほやろ、あの女」

—中略—

「エノモトは最初から奈美江に近づくつもりやったんや。—中略—あの女は昔からそうや。男に溺れて、まともな判断がでけへんようになる」 P347、348

本文より推察

桐原亮司は、高校時代に理数系が得意だったが、進学は断念した。

だが、卒業後、電気工学科に進学した園村の講義ノートで、学生以上に勉強しているようだ。

その知識量と理解度は、授業を聞いている学生よりも、深く詳しい。

一方、ゲームソフトの通信販売はかげりを見せており、亮司は他の商売を模索しているようだ。

園村が大学1年のとき、亮司はキャッシュカードの偽造を行い、2回に分けて二十数万円を引き出すことに成功していた。

キャッシュカードの偽造による不正出金で、大金を入手したようだ。

この世で隙を見せた方が負け、と彼は断定する。

そして、それは彼の周囲の人間にも適用される。

頭を使えば分かる理由から、同じ失敗を繰り返す人間は、用済みと見なすだろう。

園村が大学2年の時、彼らが立ち上げた『無限企画』の経理を担当していた西口奈美江が事件に巻き込まれた。

彼らの事務所にしている部屋にエノモトというヤクザ者が現れた時、亮司は堂々と対応して、エノモトに対してよい印象を与えたようだ。

そして、そのエノモトの計略にはまってしまった奈美江を「あほやろ」と言い捨てる。

亮司にとって「隙を見せた」側の人間だったのだろう。

その西口奈美江は殺害されて、所持していたはずの大金は行方不明となった。

亮司の父である桐原洋介と似たような構図だった。

雪穂（本文抜粋）

その雪穂が足を止めた。猫のように少しつつ上がった目を、彼女はあるサークルのポスターに向けていた。

—中略—

ソーシャルダンス部、とポスターには書いてある。括弧がついていて、永明大学合同、と但し書きがしてあった。P256

名簿に名前を書き終えた雪穂が、三人の男子学生に何かいわれて笑っていた。雪穂は江利子が手を惹かれているのを見て、少し驚いたようだ。P259

彼女たちが引き上げる時、一成は追いかけて行って声をかけた。

—中略—

「すっごくよかったです」胸の前で両手を握りしめ、川島江利子はいった。「ソーシャルダンスなんて、時代遅れなものだと思ってたんですけど、ああいうのが踊れるってすごいことですよね。選ばれた人たちっていう気がしちゃいます」

「それは違うよ」一成は首を振って否定した。

「えっ、そうですか」

「選ばれた人間がソーシャルダンスを習うんじゃない。いざというときにダンスの一つぐらい踊れるような人間が選ばれていくんだ」

—中略—

「ということは、入部の決心がついたってことかい」

「はい。彼女と二人で決めたんです。お世話になります」そうやって江利子は、隣にいた友人を見た。

—中略—

彼が唐沢雪穂の顔を真正面から見るのは、これが最初だった。整った顔立ちをしている、という印象を持った。

だが、この時彼は、彼女の猫のような目に対して、もう一つ別の感想を抱いた。そして今改めて考えてみて、そのせいで、彼女のことを単なるお嬢様とは思えないのだと気づいた。

彼女の目には、言葉ではいい表せない微妙な棘が含まれていた。

—中略—

あれはもっと危険な光だった、というのが一成の感想だ。卑しさを秘めた光、ともいえた。そして本物のお嬢様ならば、ああいう光を目に宿らせることはないはずだ、というのが彼の考えだった。P262-264

永明大前の駅で江利子は雪穂と共に電車を降りた。

—中略—

「今日はあたし、先に失礼することになると思う。ごめんね」雪穂がいった。

「デート？」

「そんなんじゃないの。ちょっと用があるから」

「ふうん」

いつからだったか、時々雪穂がこんなふうについて、江利子と別行動を取るようになった。どういう用があるのか、今は尋ねたりしない。以前しつこく訊いたことがきっかけで、彼女から交際を断られたことがあるのだ。P266

「早く元気になってね。力になるから」雪穂がいった。江利子の手を強く握ってくる。

「ありがとう。雪穂だけが支えよ」

「うん。あたしのそばにいれば大丈夫だからね」P300

唐沢雪穂は、清華女子大学英文科に進学した。

白い肌を大切にする彼女は、屋外のスポーツのサークルには目も向けなかったが、ソーシャルダンス部に足を止める。

江利子と相談する前から、雪穂はダンス部への入部を決めていた。

永明大学ソーシャルダンス部の部長にして、日本でも五指に入る篠塚製菓の専務の息子である篠塚一成は、同輩たちが目を向けた雪穂ではなく、雪穂の友人の川島江利子に魅かれた。

彼は雪穂に、見た目どおりのお嬢様ではなく、お嬢様にはありえない危険で卑しい光を見出していた。

篠塚と交際していた倉橋は、交際を断たれた原因を江利子だと考え、彼女に嫌がらせをしていた。

ある日は、数年分の帳簿の整理を江利子に押し付けたが、雪穂も手伝い、倉橋の態度に篠塚も気にかけていた。

中学時代は常に雪穂と江利子は行動を共にしていたが、最近では別行動も増えている。

以前、江利子が執拗に尋ねると、雪穂は江利子との交際を断った。

江利子が詮索しないことで、二人の交際は続いているようだ。

雪穂にとって友人とはなんなのだろう。

江利子を除くと、親しい友人の描写もないことからみて、雪穂は本来は孤独を好むのだろうか。

雪穂は、かつて遭遇した事件の被害者・藤村都子の時と同じように、江利子に対して強くかばう姿勢で終始した。